

ヘンプを北海道の基幹作物に！ 目標は全道で2万ha



北海道ヘンプ協会 代表理事
菊地治己 氏

岩手県盛岡市生まれ。73年に北大農学部を卒業、同大学院博士課程を中退し、77年に道立中央農試に就職。上川農試水稻育種科長、北見農試研究部長、十勝農試場長などを経て、2011年3月に上川農試場長で定年退職。「ほしのゆめ」「なつぼし」「ゆめびりか」など道産米の品種改良に従事。退職後、ヘンプの普及啓発活動に取り組む。専門は作物育種学、農学博士（北海道大学）。

大麻取締法の改正に向けた議論が最終局面を迎えた。厚生科学審議会の大麻規制検討小委員会で検討された4つの論点のうち、「大麻の適切な利用の推進」と「適切な栽培及び管理の徹底」の2つで、私ども北海道ヘンプ協会が提供し

た資料も引用され、議論が展開された。図4のように産業用ヘンプの栽培関係者の要望を大方満たした方向性が示されたことを高く評価したい。
個人的には退職後に始めた活動が大きく前進することを嬉しく思

図4：大麻取締法の改正方向の見通し（栽培関係）

《栽培関係者の要望への満額回答か？》 《法改正の方向性を高く評価！》

- ① 大麻草は原則栽培禁止から、**低 THC 品種と高 THC 品種を区別**して栽培を認める。
- ② 適正な規制の下での**播種用種子の国内生産と全国流通**を認める。
- ③ 海外の優れたヘンプ品種の**播種用種子の輸入と国内流通**を認める。
- ④ 植物の**部位規制**から THC 含有量による**成分規制**へ移行し、成分検査体制を整備する。
- ⑤ 伝統的な麻栽培の保護のみならず **CBD はじめ新たな栽培目的も認める**。
- ⑥ 医薬品原料用の**高 THC 品種は、特に厳格な管理の下での栽培を認める**。
- ⑦ 大麻取扱者免許制度を改正し、**免許取得の規制を標準化し緩和する**。
特に、**大麻研究者免許については、麻薬研究者免許と一元化する**。
- ⑧ 低 THC 品種の**過度な栽培規制を撤廃し、合理的かつ最小限の規制**とする。
- ⑨ THC 含有量が基準値以下の CBD 製品等の製造販売を認める。

※北海道ヘンプ協会が厚労省大麻規制検討小委員会の会議資料から推定した内容

うと同時に、北海道でのヘンプ栽培の復活と産業化を次の世代に引き継ぐのに十分な道筋が立ったことに安堵している。これまでの「布教活動」からより実践的な普及へと大きく動くだろう。

ヘンプをTHC濃度で担保

北海道ヘンプ協会（H I H A）は12年2月に発足（14年8月に法人登録）して以来、ヘンプを北海道の基幹作物として普及し、北海道農業の活性化と国内ヘンプ産業の振興をはかることを目的に活動してきた。現在、個人会員が38名、法人会員が46社、顧問と特別会員、会友を含めて会員数は1000を超えた。目指しているのは、いつでもどこでも誰でも免許を取得すればヘンプを栽培できる世の中の実現である。

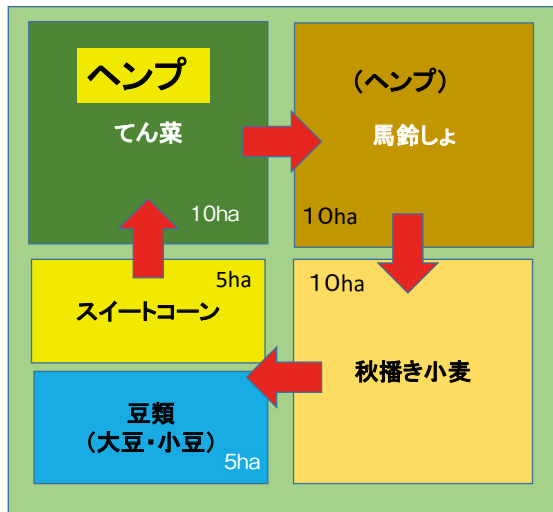
ヘンプは、麻に含まれるマリファナ成分であるTHC（テトラヒドロカンナビノール）の含有量が

低いのが特徴だ。近年、海外では大麻に関する規制緩和が進み、鎖国状態の日本は取り残されてきた。我われは産業用ヘンプのみを活動の対象に据え、嗜好用はもちろん、医療用の合法化運動は行なっていない。北海道に拠点を置き、ヘンプの普及啓発活動、北海道庁や道議会への要請活動、試験栽培・加工試験・市場調査を含む研究開発支援、栽培者免許・研究者免許の取得支援に取り組み、なかでも海外のヘンプ産業先進地の視察・報告に注力してきた。

詳細は割愛するが、ヘンプを合法化した国々ではTHC濃度の制限値を設けて管理するための法整備が示されている。日本の大麻取締法では、これまで葉と花の利用を禁止する部位別規制をしてきたが、法改正によりTHC濃度に基づく成分規制に移行する見込みがある。ようやく、ヘンプの定義がTHC濃度で担保される用途が立

図5：ヘンプを入れた場合の北海道の輪作体系(例)

4年輪作：てん菜→馬鈴しょ→秋播き小麦→豆類(スイートコーン)



である。北海道の基幹作物の一つであるビートの栽培面積は約6万haで推移してきたが、近年、健康志向の高まり等による国内の砂糖消費の低迷などから、国は約2割の減反政策を打ち出しており、製糖会社も製糖工場の統廃合を検討するなど、北海道の輪作体系への影響が懸念さ

北海道でヘンプ栽培の復活を目指す理由

つたと言えるだろう。

北海道でも明治時代には政府が麻と亜麻（フラックス）の栽培を推奨し、最盛期には北海道内に85カ所もの製麻工場があった。麻は次第に亜麻に代わられ、戦後は大麻取締法の施行、化学繊維の普及、繊維の貿易自由化などにより、麻栽培も亜麻栽培も途絶えてしまった。

18年をもって終了し、現在、北海道での栽培は皆無である。こうした歴史や経緯を踏まえ、北海道でヘンプ栽培の復活を目指す理由は大きく2つある。一つ目は、北海道では大規模な生産圃場の確保が容易であるからだ。北海道には畑が約92万ha（草地を含む）、つまり全国の2分の1の畑があり、全国の4分の1の食料生産を担っている。その畑を維持するには何種類かの作物を輪作することが必須である。

4年輪作の事例を図5に示す。我われの目標面積は、2万haである。2万haの根拠は、ビート（てん菜）の代替作物としての作付け

れている。

22年産はすでに約5万5000haに減少し、今後、最大3割程度の減反もあると当協会では予想している。この3割に相当する1万8000haにC B D等の新規用途分の2000haを加えた2万haが、北海道におけるヘンプの目標面積となる。その経済効果は、最終製品価格で、約1兆8000億円にのぼる（図6）。

昨今の肥料・農薬・燃料等の高騰の折、生産農家からの問い合わせも増えている。小規模ヘンプ栽培を否定しないものの、まずは大規模畑作農家、なかでも菜種や亜麻、ゴマなどの雑穀生産の実績がある専業農家に食用ヘンプ種子の生産に挑戦してもらいたい。こうした農家は、ヘンプのような新しい作物の栽培が軌道に乗るまでのリスク管理ができると見込めることである。興味をお持ちの方ぜひ、当協会にお声かけいただければ幸いである。

二つ目の理由は、北海道のヘンプ栽培に期待する需要家の存在である。北海道ヘンプ協会には、生産者が中心の栽培部会、需要家が中心の繊維、食品、住宅部会という四つの専門部会があり、それぞ

れ活発に活動している。ある程度、栽培が広がってから一次加工工場を作るのか、一次加工会社が栽培を誘致するのか。生産者も需要家も、誰が先駆的に取り組み、誰と組んで現実化していけるか、協会では、現在、生産者と需要家のマッチングを進めている。

ここからは、ビートの製糖会社がヘンプ産業に参入してくれたら最高！という構想だ。契約農家に種子を配り、栽培してもらって、収穫物を集荷し、加工場の運用・品質管理まで、製糖会社がついて連のノウハウは、ヘンプの栽培と加工にも役立つに違いない。ビートの種子はほぼヨーロッパ産だが、種子の輸入実務のノウハウのある製糖会社は有利である。

海外品種の導入は不可欠

ヘンプ栽培にとって、品種の問題が一番重要である。北海道米の品種改良に携わり、育種を専門としてきた私は、これまでヘンプの品種と栽培法に関する調査研究に取り組んできた。現在国内で作付けされている栃木県の育成品種である「とちぎしろ」は、北海道では晩生のため採種栽培は困難である（北海道農試による成績あり）。

図6：北海道でのヘンプ栽培がもたらす経済効果の試算



ヘンプ 2万ha の経済効果 (現行法と改正法)



私も、14年からの3年間、研究者免許を取得し、本州の在来種の栽培試験を行なった。地上部乾物は重は、1ha当たり約25tと満足の

いく成果が得られたが、開花期が9月中旬と遅く、種子は登熟不良のために十分な収穫量が得られなかった。そこで、北海道でも早く開花し、種子生産が可能な海外の品種を探索することにした。

北海道の気候に合ったEU品種リストに含まれる海外品種のなかで、注目したのはフランスのTHCゼロ%の品種である。ところが、輸入貿易管理令の規制で、播種用種子の輸入はできなかった。北海道農政部に事務局を置く北海道産業用大麻可能性検討会にて検討を重ねたものの、種子の輸入の実現には至らなかった。

その後、19年6月に北海道産業用ヘンプ連絡会議を立ち上げ、議会、行政、市民、企業が参加する体制で、議論を重ね、提言を続けてきた。今回の法改正により規制が緩和されれば、国内で遺伝資源の解明や育種研究が進むだろう。しかし、日本由来の新品種が確立されるまでに少なくとも10年近くを要するので、まずは、海外品種に頼るのが現実的である。播種用種子の輸入に関する法制度が整い、海外のヘンプ種子を自由に入手できるようになれば、北海道での大規模栽培が可能となる。

国産を求める市場はある

全国の栽培面積は10ha前後で推移し、神社の鈴縄やしめ縄、七味唐辛子の麻の実など、もっぱら伝統的な利用に限られている。

しかし、海外では、繊維が衣料の原料のほか、建築素材や自動車の内装品などに、ヘンプシードは食品に、CBDなどの機能性成分は化粧品や健康食品等に、新たな原料として広く活用されている。

我われは、海外の先行事例を紹介し、ヘンプ商品の認知度を高め、輸入商品で市場を開拓するキャンペーンを実施してきた。高齢化が進む日本は、健康で快適な生活になくしてはならないヘンプ商品にとって有望な市場になりうる。さまざまな製品を生み出すヘンプの汎用性は、栽培と商品開発の狙いが定まりにくいという弱点から、準備ができたところから取り組めるという強みになるはずだ。

海外からの輸入か、輸入原料に100%頼ってきたが、小さくともすでにヘンプの国内市場は存在している。原料の一部を国産化することで、国内のヘンプ栽培が拡大していくであろう。解禁後の展開にワクワク感が止まらない。